

一般に， K 個のスピンが互いに結合しているスピン系に対して

$$\{E.COSY\} = \sum_{p=2}^K B_p \{pQF\}$$

となる．荷重因子 B_p は， p が偶数のとき，

$$B_p = p^2/4,$$

p が奇数のとき，

$$B_p = (p-1)^2/4$$

で与えられる．

第1，第2 90°パルスの位相を β にして，第3パルスの位相を $-x$ にして測定すると，AMX3 スピン系の密度行列の $\omega_1=\omega_M$ と $\omega_2=\omega_A$ の交差ピークの部分は

$$\begin{aligned} \sigma_{cross}^3 = & -\sin^2(\beta) \sin(J_{AM}t_1/2) \cos(J_{MX}t_1/2) \cos(\omega_M t_1) 2I_{Ax} I_{Mz} \\ & + \sin^2(\beta) \cos(\beta) \sin(J_{AM}t_1/2) \sin(J_{MX}t_1/2) \sin(\omega_M t_1) 4 I_{Ax} I_{Mz} I_{Xz} \end{aligned}$$

となる．第1項は2QF-COSYに対応し，第2項は3QF-COSYに対応する．いくつかの異なる β について測定して，適当な因子 W_j に対して

$$-\sum_{j=0}^K W_j \sin^2(\beta_j) = \sum_{j=0}^K W_j \sin^2(\beta_j) \cos(\beta_j) = \text{constant}$$

とすることができれば，E.COSY スペクトルを得ることができる．

$$\beta_j = j\pi/3, \quad j=0,1,\dots,5$$

の β_j について，それぞれ， $W_0=4$ ， $W_1=1$ ， $W_2=1$ ， $W_3=0$ ， $W_4=1$ ， $W_5=3$ 回，積算位相 x ， $-x$ ， x ， $-x$ ， x ， $-x$ として積算すると良い．すなわち，

$$s(E.COSY) = 4s(\beta=0^\circ) - 3s(60^\circ) + s(120^\circ) + s(240^\circ) - 3s(300^\circ)$$

で，12回の積算でスペクトルを得ることができる．

15.3 交差緩和相関2次元 NMR

(A) NOESY

双極子-双極子相互作用による2つの核間の相関を調べるために，交差緩和による磁化移動を利用した2次元 NMR を，NOESY(NOE correlation spectroscopy)という[25]．COSY，TOCSY が J 結合を通したコヒーレントな交差分極を利用するのに対して，

NOESYは双極子-双極子相互作用による緩和のインコヒーレントな交差分極を利用する点で異なる。COSYが化学結合を介した距離情報（through-bond connectivity）を与えるのに対して、NOESYは双極子-双極子相互作用に起因する空間的な距離情報（through-space connectivity）を与える。

パルス系列を図15.24に示す。第2の90°パルスまではCOSYと同じである。第2の90°パルスによって t_1 の間に化学シフトで変調を受けた縦磁化を利用する。第290°パルスと第390°パルス間の混合時間 τ_m の間に交差緩和による磁化移動が起こり、第3のパルスで磁化移動によって変調を受けたFIDを観測する。

化学シフトの異なる2つのスピンAXを考える。それらの間にJ結合はないと仮定する。第2の90°パルス後の密度行列は

$$\sigma = \sin(\omega_A t_1) I_{Ax} + \sin(\omega_X t_1) I_{Xx} - \cos(\omega_A t_1) I_{Az} - \cos(\omega_X t_1) I_{Xz}$$

NOESYでは最後のAスピン縦磁化とXスピン縦磁化の間の交差緩和を考え、横磁化については考えない。横磁化は、たとえば、 z 方向の磁場勾配パルス（ホモスポイルパルス）を第2の90°パルスの後に印加して消去する。あるいは、後に述べるように、位相回しによっても消去できる。

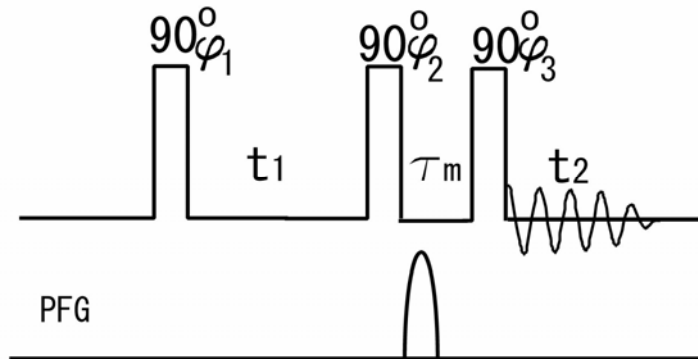


図15.24 NOESYのパルス系列。 τ_m は混合時間（mixing time）、PFGは z 方向の磁場勾配パルスである。高周波パルスの位相については本文をみよ

それぞれのスピンについて、縦磁化の平衡からのずれを m_A 、 m_X とすると、

$$m_A = M_{Az} - M_0 \quad (15.3.1a)$$

$$m_X = M_{Xz} - M_0 \quad (15.3.1b)$$

ここで、A、X両スピンの平衡磁化は等しく、 M_0 と仮定した。第2の90°パルス直後における縦磁化の平衡からのずれは

$$m_A(0) = -[1 + \cos(\omega_A t_1) \exp(-t_1/T_{2A})]M_0 \quad (15.3.2a)$$

$$m_X(0) = -[1 + \cos(\omega_X t_1) \exp(-t_1/T_{2X})]M_0 \quad (15.3.2b)$$

となる .

$$\mathbf{m} = \begin{pmatrix} m_A \\ m_X \end{pmatrix} \quad (15.3.3)$$

とすると , 平衡からのずれの時間変化は

$$\frac{d}{dt} \mathbf{m} = -\mathbf{R} \mathbf{m} \quad (15.3.4)$$

で与えられる . ここで , \mathbf{R} は緩和行列で

$$\mathbf{R} = \begin{pmatrix} R_{AA} & R_{AX} \\ R_{XA} & R_{XX} \end{pmatrix}, \quad R_{XA} = R_{AX} \quad (15.3.5)$$

である . 形式的な解は

$$\mathbf{m}(\tau_m) = \exp\{-\mathbf{R}\tau_m\} \mathbf{m}(0)$$

と書くことができる . 第 3 の 90° パルス後の A スピンの FID 信号は

$$s_A(t_1, \tau_m, t_2) = i \exp(i\omega_A t_2) \exp(-t_2/T_{2A}) \{ [\exp(-\mathbf{R}\tau_m)]_{AA} \{1 + \cos(\omega_A t_1) \exp(-t_1/T_{2A})\} - 1 \\ + [\exp(-\mathbf{R}\tau_m)]_{AX} \{1 + \cos(\omega_X t_1) \exp(-t_1/T_{2A})\} \} M_0$$

となる . これは 2 つの部分

$$s_A^{cross}(t_1, \tau_m, t_2) = i \exp(i\omega_A t_2) \exp(-t_2/T_{2A}) \{ [\exp(-\mathbf{R}\tau_m)]_{AA} \cos(\omega_A t_1) \exp(-t_1/T_{2A}) \\ + [\exp(-\mathbf{R}\tau_m)]_{AX} \cos(\omega_X t_1) \exp(-t_1/T_{2A}) \} M_0 \quad (15.3.6a)$$

$$s_A^{axial}(t_1, \tau_m, t_2) = i \exp(i\omega_A t_2) \exp(-t_2/T_{2A}) \{ [\exp(-\mathbf{R}\tau_m)]_{AA} - 1 + [\exp(-\mathbf{R}\tau_m)]_{AX} \} M_0 \quad (15.3.6b)$$

に分けられる . s_A^{cross} は対角ピークと交差ピークを与え , s_A^{axial} は $\omega_1 = 0$ に軸性ピークを与える . τ_m が長くなると交差ピークと対角ピークは消えるが , 軸性ピークは残る . これは混合時間 τ_m の間に平衡磁化の方向へ戻ってきた縦磁化によるもので , t_1 には依存しない .

ピークの強度は混合係数 (mixing coefficient) は

$$Q_{ij} = [\exp(-R\tau_m)]_{ij} M_0 \quad (15.3.7)$$

で与えられる .

$$R_C = [(R_{AA} - R_{XX})^2 + 4R_{AX}R_{XA}]^{1/2} \quad (15.3.8a)$$

$$R_L = \frac{1}{2}(R_{AA} + R_{XX}) - \frac{1}{2}R_C \quad (15.3.8b)$$

とすると , この行列要素は

$$Q_{AA}(\tau_m) = \frac{1}{2}M_0 \exp(-R_L\tau_m) \left[\left(1 - \frac{R_{AA} - R_{XX}}{R_C}\right) + \left(1 + \frac{R_{AA} - R_{XX}}{R_C}\right) \exp(-R_C\tau_m) \right] \quad (15.3.9a)$$

$$Q_{XX}(\tau_m) = \frac{1}{2}M_0 \exp(-R_L\tau_m) \left[\left(1 - \frac{R_{XX} - R_{AA}}{R_C}\right) + \left(1 + \frac{R_{XX} - R_{AA}}{R_C}\right) \exp(-R_C\tau_m) \right] \quad (15.3.9b)$$

$$Q_{AX}(\tau_m) = Q_{XA}(\tau_m) = -M_0 \frac{R_{AX}}{R_C} \exp(-R_L\tau_m) [1 - \exp(-R_C\tau_m)] \quad (15.3.9c)$$

である . 対角ピークの強度は , R_L および R_C の時定数をもって τ_m の増加と共に減少する . 一方 , 交差ピークの強度は , R_L の時定数で減衰する項と R_C の時定数で 0 から 1 へ増加する項の積からなっている . ここで , R_L を漏洩緩和速度 (leakage relaxation rate) , R_C を交差緩和速度 (cross relaxation rate) と呼ぶ .

緩和行列の要素は

$$R_{AA} = (W_0 + 2W_{1A} + W_2) + R_{1A} \quad (15.3.10a)$$

$$R_{XX} = (W_0 + 2W_{1X} + W_2) + R_{1X} \quad (15.3.10b)$$

$$R_{AX} = R_{XA} = (W_2 - W_0) \quad (15.3.10c)$$

R_{1A} および R_{1X} は , AX 2 スピンの双極子 双極子相互作用を除いた他の原因による縦緩和速度である . 分子運動が単純に 1 つの相関時間 τ_c で表される場合には , (9.8.15) で定義した K

$$K = \frac{2}{5} \left(\frac{\mu_0}{4\pi} \right)^2 \frac{\hbar^2 \gamma^4}{r^6} I(I+1) \quad (15.3.11a)$$

および , 第 9 章 2 節で導入した規格化したスペクトル密度関数

$$\tilde{J}(\omega) = \frac{2\tau_c}{1 + \omega^2\tau_c^2} \quad (15.3.11b)$$

を用いると , $\omega_A \approx \omega_X \approx \omega_0$ であるので ,

$$W_0 = \frac{K}{6} \tilde{J}(0), \quad W_{1A} = \frac{K}{4} \tilde{J}(\omega_0), \quad W_{1X} = \frac{K}{4} \tilde{J}(\omega_0), \quad W_2 = K \tilde{J}(2\omega_0) \quad (15.3.12)$$

である . したがって ,

$$R_{AA} = K \left\{ \frac{1}{6} \tilde{J}(0) + \frac{1}{2} \tilde{J}(\omega_0) + \tilde{J}(2\omega_0) \right\} + R_{1A}$$

$$R_{XX} = K \left\{ \frac{1}{6} \tilde{J}(0) + \frac{1}{2} \tilde{J}(\omega_0) + \tilde{J}(2\omega_0) \right\} + R_{1X}$$

$$R_{AX} = R_{XA} = K \left\{ \tilde{J}(2\omega_0) - \frac{1}{6} \tilde{J}(0) \right\}$$

となる． $R_{1A} = R_{1X} = 0$ のときには， $R_{AA} = R_{XX}$ となり，混合係数は

$$Q_{AA}(\tau_m) = Q_{XX}(\tau_m) = \frac{1}{2} M_0 \exp(-R_L \tau_m) [1 + \exp(-R_C \tau_m)] \quad (15.3.13a)$$

$$Q_{AX}(\tau_m) = Q_{XA}(\tau_m) = -M_0 \frac{R_{AX}}{R_C} \exp(-R_L \tau_m) [1 - \exp(-R_C \tau_m)] \quad (15.3.13b)$$

$$R_{AX} = K \left(\frac{2\tau_c}{1 + 4\omega_0^2 \tau_c^2} - \frac{1}{3} \tau_c \right) \quad (15.3.13c)$$

$$R_C = 2 |R_{AX}| \quad (15.3.13d)$$

$$R_L = K \left\{ \frac{1}{3} \tau_c + \frac{\tau_c}{1 + \omega_0^2 \tau_c^2} + \frac{2\tau_c}{1 + 4\omega_0^2 \tau_c^2} - \left| \frac{2\tau_c}{1 + 4\omega_0^2 \tau_c^2} - \frac{1}{3} \tau_c \right| \right\} \quad (15.3.13e)$$

である．図 15.25 に Q_{AA} と Q_{AX} を混合時間 τ_m の関数として示す．測定周波数 $\omega_0/2\pi = 500\text{MHz}$ ，プロトン間距離 $3 \times 10^{-10}\text{m}(3\text{\AA})$ ，3つの相関時間， $\omega_0 \tau_c = 1.118 \times 10$ ， $\omega_0 \tau_c = 1.118$ ， $\omega_0 \tau_c = 1.118 \times 10^{-1}$ で計算した． R_{1A} ， R_{1X} は無視した．

$\omega_0 \tau_c \ll 1$ の極度尖鋭化 (extremely narrowing) のときには，

$$\tilde{J}(\omega_0) = \tilde{J}(0) = \tilde{J}(2\omega_0) = 2\tau_c$$

であるので，

$$R_C = \frac{10}{3} K \tau_c = R_{AX}, \quad R_L = \frac{5}{3} K \tau_c, \quad Q_{AX} < 0$$

この場合，AX 2 スピンの双極子 双極子相互作用が漏洩緩和に寄与する．

これに対して， $\omega_0 \tau_c \gg 1$ のスピン拡散律速 (spin diffusion limit) の場合には

$$\tilde{J}(\omega_0) = \tilde{J}(2\omega_0) = 0, \quad \tilde{J}(0) = 2\tau_c$$

$$R_C = \frac{2}{3} q \tau_c = -R_{AX}, \quad R_L = 0, \quad Q_{AX} > 0$$

この場合，AX 2 スピンの双極子 双極子相互作用は漏洩緩和に寄与しない．

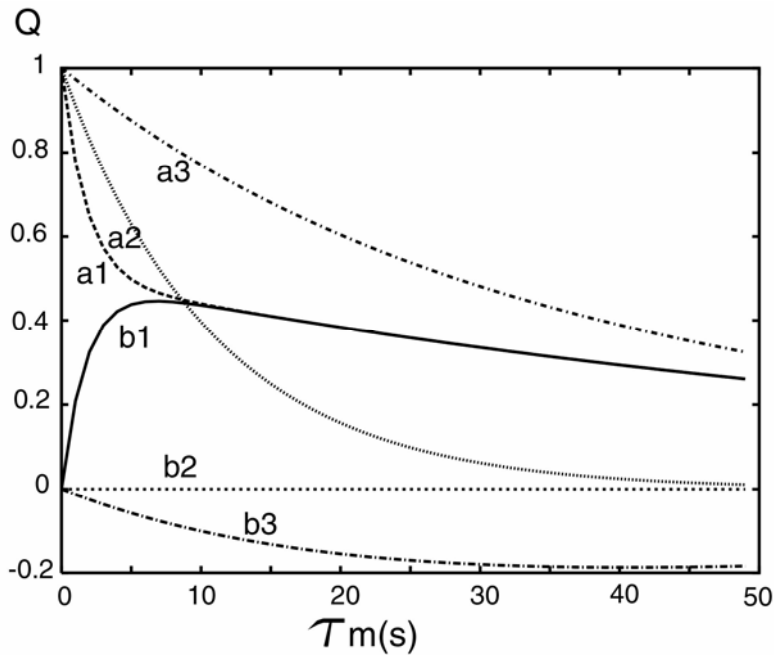


図 15.25 NOESYにおける対角ピーク (a) と交差ピーク (b) の混合時間 (τ_m) 依存性．周波数 500MHz, 2つのプロトン間距離 $r=3 \times 10^{-10}\text{m}$ (3Å), R_{1A}, R_{1X} は無視した．1: $\omega_0\tau_c = 1.118 \times 10$, 2; $\omega_0\tau_c = 1.118$, 3; $\omega_0\tau_c = 1.118 \times 10^{-1}$

ここで注意すべきことは、スピン拡散律速の場合、NOESYの交差ピークが正(対角ピークと同じ符号)で、極度尖鋭化の場合、負(対角ピークと異なる符号)であることである。これは、第9章で述べた1次元NMRのNOEの正負と逆である。すなわち、スピン拡散律速の場合負、極度尖鋭化の場合正である。1次元NOEでは、観測核に近接する核を定期的に飽和させ、磁化を減少させたとき、スピン拡散律速の場合、観測核の磁化は、隣接核と同様減少するが、極度尖鋭化の場合、逆に増加すると考えると、正負の違いは単なる定義の違いに帰結する。

図 15.26 にNOESYの対角ピークと交差ピークの強度をプロトン間距離の関数として示した。測定周波数 500MHz, 混合時間 0.3s, $\tau_c=3.5588 \times 10^{-9}$, $\tau_c=1 \times 10^{-9}$, $\tau_c=3.5588 \times 10^{-8}$ である。プロトン間距離が $5 \times 10^{-10}\text{m}$ (5Å)以上になると急激に交差ピークの強度が減少することがわかる。

先に、NOESYでは第2の 90° パルス後の横磁化は必要ないので、磁場勾配パルスで消去すると述べた。NOESYの交差ピークと共に、J結合がある場合には、横磁化は、不要なJ交差分極による信号を生ずる。したがって、横磁化を消去しなければならない。第1, 第3のパルスの位相を逆転させた次の2つの実験結果を加え合わせることによって

も、 J 交差分極による信号を、部分的に消去することができる。不要な軸性ピークも消去する[26]。

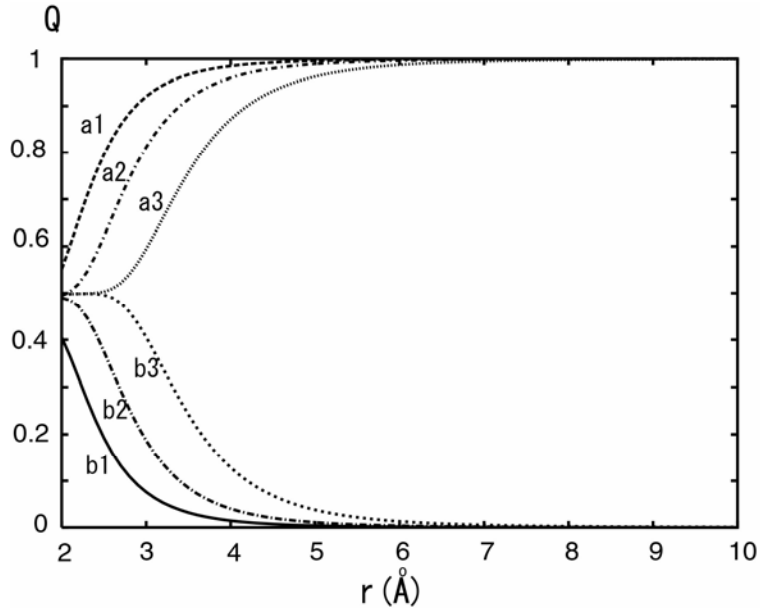


図 15.26 NOESYにおける対角ピーク (a) と交差ピーク (b) のプロトン間距離 (r) 依存性。周波数 500MHz, 混合時間 0.3s。1: $\tau_c = 3.5588 \times 10^{-9}$ s, 2: $\tau_c = 1 \times 10^{-8}$ s, 3: $\tau_c = 3.5588 \times 10^{-8}$ s

実験 1 : $90^\circ_x - 90^\circ_x - 90^\circ_x$

実験 2 : $90^\circ_{-x} - 90^\circ_x - 90^\circ_{-x}$

実験 1 の第 3 の 90°_x パルス直前の密度行列は(15.2.5)で $t_2 = \tau_m$ としたものである。第 3 の 90°_x パルス直後には

$$\begin{aligned}
\sigma_{x,x,x} = & \{ \cos(J\tau_m/2) \cos(\omega_A \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) + \sin(J\tau_m/2) \cos(\omega_A \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} I_{Ax} \\
& + \cos(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) I_{Ay} \\
& + \{ -\cos(\omega_A \tau_m) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) + \sin(\omega_A \tau_m) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1) \} 2I_{Ax} I_{Xz} \\
& + \{ \cos(J\tau_m/2) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) - \sin(J\tau_m/2) \cos(\omega_X \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} 2I_{Ay} I_{Xz} \\
& + \{ \cos(J\tau_m/2) \sin(\omega_A \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) + \sin(J\tau_m/2) \sin(\omega_A \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} I_{Az} \\
& + \{ \sin(J\tau_m/2) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) + \cos(J\tau_m/2) \cos(\omega_X \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} I_{Xx} \\
& + \cos(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1) I_{Xy} \\
& + \{ \sin(\omega_A \tau_m) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) - \cos(\omega_A \tau_m) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1) \} 2I_{Az} I_{Xx} \\
& + \{ -\sin(J\tau_m/2) \cos(\omega_A \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) + \cos(J\tau_m/2) \cos(\omega_A \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} 2I_{Az} I_{Xy} \\
& + \{ \sin(J\tau_m/2) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) + \cos(J\tau_m/2) \sin(\omega_X \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} I_{Xz} \\
& + \{ -\cos(J\tau_m/2) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) + \sin(J\tau_m/2) \sin(\omega_X \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} 2I_{Ay} I_{Xx} \\
& + \{ \sin(J\tau_m/2) \sin(\omega_A \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) - \cos(J\tau_m/2) \sin(\omega_A \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} 2I_{Ax} I_{Xy} \\
& + \{ \cos(\omega_A \tau_m) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) + \sin(\omega_A \tau_m) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1) \} 2I_{Ax} I_{Xx} \\
& + \{ -\sin(\omega_A \tau_m) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) - \cos(\omega_A \tau_m) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1) \} 2I_{Az} I_{Xz}
\end{aligned}$$

となる．ここで第 1, 2, 3, 4, 6, 7, 8, 9 行が FID に寄与する．第 2 と第 7 行が NOESY に寄与するもので，その他の項は不要なものである．

実験 2 の第 3 の 90°x パルス直後の密度行列は

$$\begin{aligned}
\sigma_{-x,x,-x} = & \{ -\cos(J\tau_m/2) \cos(\omega_A \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) - \sin(J\tau_m/2) \cos(\omega_A \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} I_{Ax} \\
& + \cos(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) I_{Ay} \\
& + \{ -\cos(\omega_A \tau_m) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) + \sin(\omega_A \tau_m) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1) \} 2I_{Ax} I_{Xz} \\
& + \{ -\cos(J\tau_m/2) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) + \sin(J\tau_m/2) \cos(\omega_X \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} 2I_{Ay} I_{Xz} \\
& + \{ \cos(J\tau_m/2) \sin(\omega_A \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) + \sin(J\tau_m/2) \sin(\omega_A \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} I_{Az} \\
& + \{ -\sin(J\tau_m/2) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) - \cos(J\tau_m/2) \cos(\omega_X \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} I_{Xx} \\
& + \cos(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1) I_{Xy} \\
& + \{ \sin(\omega_A \tau_m) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) - \cos(\omega_A \tau_m) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1) \} 2I_{Az} I_{Xx} \\
& + \{ \sin(J\tau_m/2) \cos(\omega_A \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) - \cos(J\tau_m/2) \cos(\omega_A \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} 2I_{Az} I_{Xy} \\
& + \{ \sin(J\tau_m/2) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) + \cos(J\tau_m/2) \sin(\omega_X \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} I_{Xz} \\
& + \{ -\cos(J\tau_m/2) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) + \sin(J\tau_m/2) \sin(\omega_X \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} 2I_{Ay} I_{Xx} \\
& + \{ \sin(J\tau_m/2) \sin(\omega_A \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) - \cos(J\tau_m/2) \sin(\omega_A \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} 2I_{Ax} I_{Xy} \\
& + \{ -\cos(\omega_A \tau_m) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) - \sin(\omega_A \tau_m) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1) \} 2I_{Ax} I_{Xx} \\
& + \{ \sin(\omega_A \tau_m) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) + \cos(\omega_A \tau_m) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1) \} 2I_{Az} I_{Xz}
\end{aligned}$$

となる．FID に寄与する第 1, 4, 6, 9 行が実験 1 と符号が逆である．これに対して，第 2, 3, 7, 8 行が同符合になる．2 つの FID を加え合わせると，1, 4, 6, 9 の横磁化の効果は消える．しかし，第 3, 8 行が残る．実験 1 と実験 2 で，第 2, 第 3 の 90°パルスの位相関係が逆転しているので，軸性ピークが消える．第 3 行は

$$\begin{aligned} & \{-\cos(\omega_A \tau_m) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) + \sin(\omega_A \tau_m) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1)\} 2I_{Ax} I_{Xz} \\ & = -(1/2) \sin(J t_1/2) \{ \cos[(\omega_A + \omega_X) \tau_m] [\cos(\omega_A t_1) + \cos(\omega_X t_1)] \\ & + \cos[(\omega_A - \omega_X) \tau_m] [\cos(\omega_A t_1) - \cos(\omega_X t_1)] \} 2I_{Ax} I_{Xz} \end{aligned}$$

と書くことができ、第2の90°パルスで作られた0量子コヒーレンスと2量子コヒーレンスが τ_m の間時間発展して、最後の90°パルスで1量子コヒーレンスに変換されたものである。このうち、2量子コヒーレンスは、位相を変えた、さらに次の2つの実験(実験3, 実験4)を加え合わせることで消去することができるが、0量子コヒーレンスは消すことができない。

実験3 : 90°-y—90°-y—90°x

実験4 : 90°y—90°-y—90°-x

実験3の第3 90°パルス後の密度行列は

$$\begin{aligned} \sigma_{y,-y,x} = & \{ \cos(J \tau_m/2) \sin(\omega_A \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) + \sin(J \tau_m/2) \sin(\omega_A \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} I_{Ax} \\ & + \cos(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) I_{Ay} \\ & + \{-\sin(\omega_A \tau_m) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) + \cos(\omega_A \tau_m) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1)\} 2I_{Ax} I_{Xz} \\ & + \{ \cos(J \tau_m/2) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) - \sin(J \tau_m/2) \sin(\omega_X \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} 2I_{Ay} I_{Xz} \\ & + \{-\cos(J \tau_m/2) \cos(\omega_A \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) - \sin(J \tau_m/2) \cos(\omega_A \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1)\} I_{Az} \\ & + \{ \sin(J \tau_m/2) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) + \cos(J \tau_m/2) \sin(\omega_X \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} I_{Xx} \\ & + \cos(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1) I_{Xy} \\ & + \{ \cos(\omega_A \tau_m) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) - \sin(\omega_A \tau_m) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1) \} 2I_{Az} I_{Xx} \\ & + \{-\sin(J \tau_m/2) \sin(\omega_A \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) + \cos(J \tau_m/2) \sin(\omega_A \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1)\} 2I_{Az} I_{Xy} \\ & + \{-\sin(J \tau_m/2) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) - \cos(J \tau_m/2) \cos(\omega_X \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1)\} I_{Xz} \\ & + \{ \cos(J \tau_m/2) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) - \sin(J \tau_m/2) \cos(\omega_X \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} 2I_{Ay} I_{Xx} \\ & + \{-\sin(J \tau_m/2) \cos(\omega_A \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) + \cos(J \tau_m/2) \cos(\omega_A \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1)\} 2I_{Ax} I_{Xy} \\ & + \{-\sin(\omega_A \tau_m) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) - \cos(\omega_A \tau_m) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1)\} 2I_{Ax} I_{Xx} \\ & + \{ \cos(\omega_A \tau_m) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) + \sin(\omega_A \tau_m) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1) \} 2I_{Az} I_{Xz} \end{aligned}$$

となり、実験4では

$$\begin{aligned} \sigma_{y,-y,x} = & \{-\cos(J \tau_m/2) \sin(\omega_A \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) - \sin(J \tau_m/2) \sin(\omega_A \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1)\} I_{Ax} \\ & + \cos(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) I_{Ay} \\ & + \{-\sin(\omega_A \tau_m) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) + \cos(\omega_A \tau_m) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1)\} 2I_{Ax} I_{Xz} \\ & + \{-\cos(J \tau_m/2) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) + \sin(J \tau_m/2) \sin(\omega_X \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1)\} 2I_{Ay} I_{Xz} \\ & + \{-\cos(J \tau_m/2) \cos(\omega_A \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) - \sin(J \tau_m/2) \cos(\omega_A \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1)\} I_{Az} \\ & + \{-\sin(J \tau_m/2) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) - \cos(J \tau_m/2) \sin(\omega_X \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1)\} I_{Xx} \\ & + \cos(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1) I_{Xy} \\ & + \{ \cos(\omega_A \tau_m) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_A t_1) - \sin(\omega_A \tau_m) \sin(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \cos(\omega_X t_1) \} 2I_{Az} I_{Xx} \\ & + \{ \sin(J \tau_m/2) \sin(\omega_A \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) - \cos(J \tau_m/2) \sin(\omega_A \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} 2I_{Az} I_{Xy} \\ & + \{-\sin(J \tau_m/2) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) - \cos(J \tau_m/2) \cos(\omega_X \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1)\} I_{Xz} \\ & + \{ \cos(J \tau_m/2) \cos(\omega_X \tau_m) \sin(J t_1/2) \sin(\omega_A t_1) - \sin(J \tau_m/2) \cos(\omega_X \tau_m) \cos(J t_1/2) \sin(\omega_X t_1) \} 2I_{Ay} I_{Xx} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 &+ \{-\sin(J\tau_m/2)\cos(\omega_A\tau_m)\cos(Jt_1/2)\sin(\omega_A t_1) + \cos(J\tau_m/2)\cos(\omega_A\tau_m)\sin(Jt_1/2)\sin(\omega_X t_1)\} 2I_{Ax} I_{Xy} \\
 &+ \{\sin(\omega_A\tau_m)\cos(\omega_X\tau_m)\sin(Jt_1/2)\cos(\omega_A t_1) + \cos(\omega_A\tau_m)\sin(\omega_X\tau_m)\sin(Jt_1/2)\cos(\omega_X t_1)\} 2I_{Ax} I_{Xx} \\
 &+ \{-\cos(\omega_A\tau_m)\sin(\omega_X\tau_m)\sin(Jt_1/2)\cos(\omega_A t_1) - \sin(\omega_A\tau_m)\cos(\omega_X\tau_m)\sin(Jt_1/2)\cos(\omega_X t_1)\} 2I_{Az} I_{Xz}
 \end{aligned}$$

となる．実験3, 4の第1, 4, 6, 9行の横磁化の効果は消え, 第2, 3, 6, 8行が残る．このうち第3行は実験1, 2と組み合わせると

$$\begin{aligned}
 &\{-\cos(\omega_A\tau_m)\cos(\omega_X\tau_m)\sin(Jt_1/2)\cos(\omega_A t_1) + \sin(\omega_A\tau_m)\sin(\omega_X\tau_m)\sin(Jt_1/2)\cos(\omega_X t_1)\} 2I_{Ax} I_{Xz} \\
 &+ \{-\sin(\omega_A\tau_m)\sin(\omega_X\tau_m)\sin(Jt_1/2)\cos(\omega_A t_1) + \cos(\omega_A\tau_m)\cos(\omega_X\tau_m)\sin(Jt_1/2)\cos(\omega_X t_1)\} 2I_{Ax} I_{Xz} \\
 &= -\{\cos(\omega_A t_1) - \cos(\omega_X t_1)\} \cos\{(\omega_A - \omega_X)\tau_m\} \sin(Jt_1/2) 2I_{Ax} I_{Xz}
 \end{aligned}$$

となり, これは τ_m の間0量子コヒーレンスが時間発展したものである．第8行についても同様である．

0量子コヒーレンスが位相回して消えないのは, 0量子がパルスの位相に依存しないことによる．0量子コヒーレンスを消去するために, NOESYの交差ピークと0量子コ

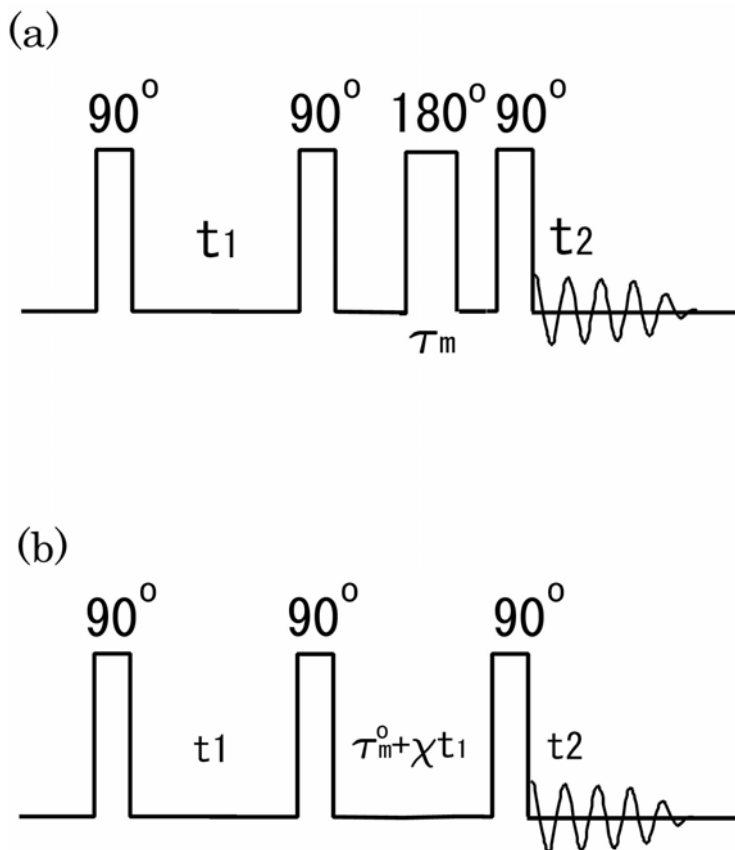


図 15.27 (a) 混合期の中に 180° パルスを挿入．(b) 混合時間を $\tau_m = \tau_m^0 + \chi t_1$ と変化

ヒーレンスの τ_m 依存性の違いを利用する。前者は緩やかな指数関数的であるのに対して、後者は振動的である。 τ_m をある固定した値の周りにランダムに変えた実験を行い、それらの結果を加算平均し、振動的な0量子コヒーレンスを平均化して消去する。この方法は時間がかかるので、 t_1 の増加と共に τ_m ある値の周りにランダムに変える方法もある。また、図15.27aに示すように、混合期の中に縦磁化の交差緩和には関係しない 180° パルス挿入する。FID取り込みごとにランダムな位置に挿入することによって、0量子コヒーレンスの再結像が不完全でランダムにおこり、平均として消える。また、 180° パルスの最適な挿入位置も検討されている[27]。

図15.27bは、混合時間を次式のように、 t_1 の増加と共に増加するようにしたものである。

$$\tau_m = \tau_m^0 + \chi t_1$$

混合期に生成されたコヒーレンスは t_1 と共に時間発展するので、0量子コヒーレンスは ω_1 方向に $\pm(\omega_A - \omega_X)\chi$ ずれたところに現れる。したがって、 J 交差ピークはNOESYスペクトルのような $\omega_1 = \omega_2$ に対する鏡映対称を失う。得られたデータを対称化することによって、0量子コヒーレンスを含む J 交差ピークを消去する[28]。

ω_1 軸についてのQDを行うために、第1、第3の 90° パルスの位相を x, y にした実験を行う。 $90^\circ x - 90^\circ x - 90^\circ x$ の後のNOESYに必要な密度行列の項は

$$\cos(\omega_A t_1) I_{Ax} + \cos(\omega_X t_1) I_{Xx}$$

$90^\circ y - 90^\circ x - 90^\circ y$ のときには

$$\sin(\omega_A t_1) I_{Ax} + \sin(\omega_X t_1) I_{Xx}$$

表15.11 NOESYの位相回し

	第1 90° パルス	第2 90° パルス	第3 90° パルス	積算位相
1	x	x	x	x
2	$-x$	x	$-x$	x
3	$-y$	$-y$	x	x
4	y	$-y$	$-x$	x
5	y	x	y	x
6	$-y$	x	$-y$	x
7	x	$-y$	y	x
8	$-x$	$-y$	$-y$	x

となり，加え合わせると，FIDは $\sum_{j,k} G_{jk} \exp(-i\omega_j t_1) \exp(i\omega_k t_2)$ の形になるので， ω_1 軸につ

いてのQDが可能になる．基本的な位相回しを表 15.11 に示す．純吸収型のスペクトルを得るには，第1から第4までの実験と第5から第8までの実験を別のメモリー領域に積算して，Statesの方法でデータ処理を行えばよい．

ところで，基本的な NOESY のパルス系列は，化学交換を行っている系について最初に適用され，有益な情報を与えた[29,30]．特に化学交換を取り扱う場合を，交換2次元NMR (2D exchange spectroscopy (EXSY)あるいは(EXCSY)) という．

混合時間の間に，着目する核がA状態とX状態の間で化学交換すると，A信号とX信号の間で磁化移動が行われる．交換速度を k_{AX} ， k_{XA} とすると，化学交換は

$$\begin{aligned} \frac{d[A]}{dt} &= -k_{AX}[A] + k_{XA}[X] \\ \frac{d[X]}{dt} &= k_{AX}[A] - k_{XA}[X] \end{aligned} \quad (15.3.14)$$

と表されるので， $R_{AX} = -k_{XA}$ に対応させることができる． R_{AX} は常に負であるので，化学交換による交差ピークは，常に正である．

$$\begin{aligned} R_C &= \{(k_{AX} - k_{XA})^2 + 4k_{XA}k_{AX}\}^{1/2} = (k_{AX} + k_{XA}) \\ R_L &= \frac{1}{2}(k_{AX} + k_{XA}) - \frac{1}{2}(k_{AX} + k_{XA}) + \frac{1}{2}\left(\frac{1}{T_{1A}} + \frac{1}{T_{1X}}\right) \end{aligned}$$

であるので，

$$\begin{aligned} Q_{AA} &= \frac{M_0}{2} \frac{k_{XA}}{(k_{AX} + k_{XA})} \exp\left[-\frac{1}{2}\left(\frac{1}{T_{1A}} + \frac{1}{T_{1A}}\right)\tau_m\right] \left\{1 - \frac{(k_{AX} - k_{XA})}{(k_{AX} + k_{XA})}\right. \\ &\quad \left.+ \left[1 + \frac{(k_{AX} - k_{XA})}{(k_{AX} + k_{XA})}\right] \exp[-(k_{AX} + k_{XA})\tau_m]\right\} \\ Q_{XX} &= \frac{M_0}{2} \frac{k_{AX}}{(k_{AX} + k_{XA})} \exp\left[-\frac{1}{2}\left(\frac{1}{T_{1A}} + \frac{1}{T_{1A}}\right)\tau_m\right] \left\{1 - \frac{(k_{XA} - k_{AX})}{(k_{AX} + k_{XA})}\right. \\ &\quad \left.+ \left[1 + \frac{(k_{XA} - k_{AX})}{(k_{AX} + k_{XA})}\right] \exp[-(k_{AX} + k_{XA})\tau_m]\right\} \\ Q_{AX} &= M_0 \frac{k_{AX}k_{XA}}{(k_{AX} + k_{XA})^2} \exp\left[-\frac{1}{2}\left(\frac{1}{T_{1A}} + \frac{1}{T_{1A}}\right)\tau_m\right] \{1 - \exp[-(k_{AX} + k_{XA})\tau_m]\} \end{aligned}$$

と書くことができる． M_0 は着目する核の全磁化である．

A, X 2つの状態が等しい確率で出現する場合には，

$$k_{AX} = k_{XA} = k$$

$$R_1 = \frac{1}{2} \left(\frac{1}{T_{1A}} + \frac{1}{T_{1X}} \right)$$

とにおいて、

$$Q_{AA} = \frac{1}{4} M_0 \exp(-R_1 \tau_m) \{1 + \exp(-2k \tau_m)\} \quad (15.3.15a)$$

$$Q_{XX} = \frac{1}{4} M_0 \exp(-R_1 \tau_m) \{1 + \exp(-2k \tau_m)\} \quad (15.3.15b)$$

$$Q_{AX} = \frac{1}{4} M_0 \exp(-R_1 \tau_m) \{1 - \exp(-2k \tau_m)\} \quad (15.3.15c)$$

$$Q_{XA} = \frac{1}{4} M_0 \exp(-R_1 \tau_m) \{1 - \exp(-2k \tau_m)\} \quad (15.3.15d)$$

交換速度を求めるには、 τ_m を変えたいいくつかのNOESYスペクトルを測定する必要がある。これは時間のかかる実験なので、Bodenhausenらは時間短縮の方法として、アコーディオン (accordion) と呼ばれる実験法を考案した[31,32]。混合時間 τ_m を t_1 の増加と共に、 $\tau_m = \chi t_1$ のように変える。 t_1 についてのフーリエ変換は τ_m にも及ぶので、混合係数も周波数の関数になる。

$$Q_{AA}(\omega) = \frac{1}{4} M_0 \left\{ \frac{R_1}{R_1^2 + (\chi \omega_1)^2} + \frac{R_1 + 2k}{(R_1 + 2k)^2 + (\chi \omega_1)^2} \right\} \quad (15.3.16a)$$

$$Q_{AX}(\omega) = \frac{1}{4} M_0 \left\{ \frac{R_1}{R_1^2 + (\chi \omega_1)^2} - \frac{R_1 + 2k}{(R_1 + 2k)^2 + (\chi \omega_1)^2} \right\} \quad (15.3.16b)$$

これは2次元スペクトルの各ピークを中心とした ω_1 軸に沿う線形を与えるので、これを解析することによって交換速度がえられる。

(B) ROESY

NOESYでは、相関時間が $\omega \tau_c = \sqrt{5}/2 \approx 1.118$ 近傍のときには(大きさが中程度の分子)、交差ピークがきわめて小さく、観測不可能になる。これを避けるために、回転系での交差緩和を利用した方法が提案された。CAMELSPIN (cross-relaxation appropriate for minimolecules emulated by locked spins)[33]、あるいは、ROESY(rotating-frame Overhauser enhancement spectroscopy) [34,35]と呼ばれるものである。パルス系列を図 15.28 に示す。

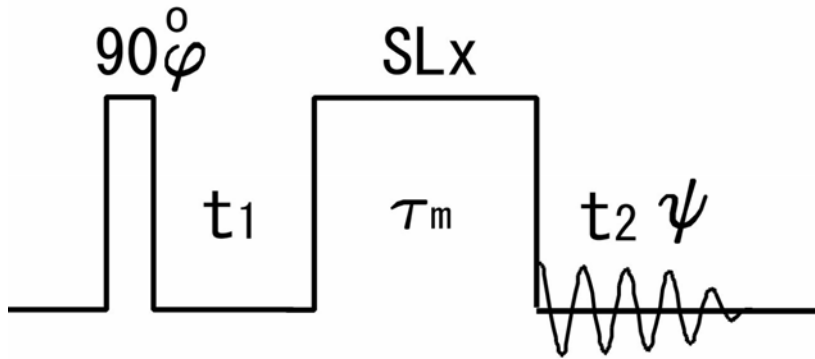


図 15.28 ROESYのパルス系列．SLxはパルス幅 τ_m のx方向のスピロックパルス．第1パルスの位相 ϕ は $x, y, -x, -y$ と変える．積算位相 ψ は $x, x, -x, -x$ で，純吸収型のスペクトルを得るために，交互に別のメモリーに保存する

緩和が双極子-双極子相互作用の揺動によっておこる場合には，前節で述べた緩和行列の要素は(9.8.13)および(9.8.14)で与えられる．

$$R_{AA} = R_{XX} = K \left(\frac{5}{6} \tau_c + \frac{3}{2} \frac{\tau_c}{1 + \omega^2 \tau_c^2} + \frac{\tau_c}{1 + 4\omega^2 \tau_c^2} \right)$$

$$R_{AX} = R_{XA} = K \left(\frac{2}{3} \tau_c + \frac{\tau_c}{1 + \omega^2 \tau_c^2} \right)$$

$$K = \left(\frac{\mu_0}{4\pi} \right)^2 \frac{2}{5} \frac{\hbar^2 \gamma^4}{r_{AX}^6} I(I+1)$$

これより

$$R_L = K \left(\frac{1}{6} \tau_c + \frac{1}{2} \frac{\tau_c}{1 + \omega^2 \tau_c^2} + \frac{\tau_c}{1 + 4\omega^2 \tau_c^2} \right)$$

$$R_C = 2K \left(\frac{2}{3} \tau_c + \frac{\tau_c}{1 + \omega^2 \tau_c^2} \right)$$

であるので，

$$Q_{AA} = \frac{1}{2} M_0 \exp(-R_L \tau_m) \{1 + \exp(-R_C \tau_m)\} \quad (15.3.17a)$$

$$Q_{AX} = -\frac{1}{2} M_0 \exp(-R_L \tau_m) \{1 - \exp(-R_C \tau_m)\} \quad (15.3.17b)$$

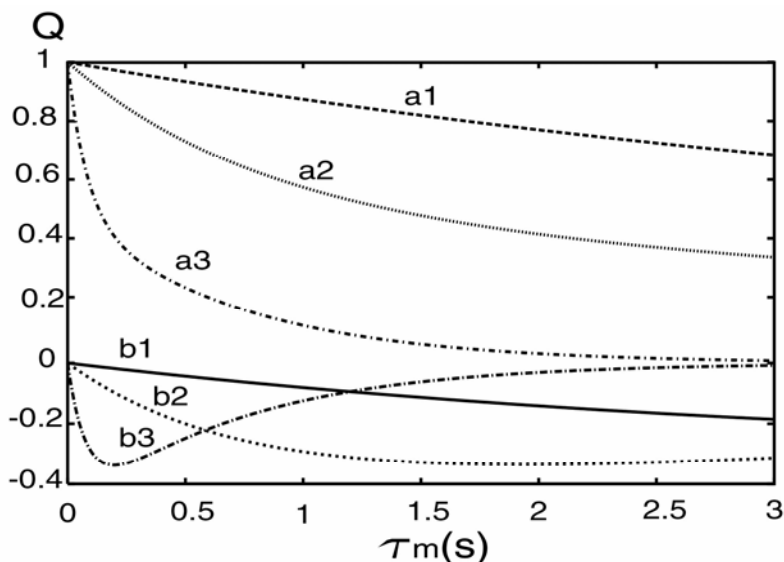


図 15.29 ROESYの対角ピーク(a)と交差ピーク(b)の混合時間(τ_m)依存性.周波数 500MHz , 2つのプロトン間距離 $r=3 \times 10^{-10}$ m . 1 : $\tau_c=3.5588 \times 10^{-10}$ s , 2 : $\tau_c=3.5588 \times 10^{-9}$ s , 3 : $\tau_c=3.5588 \times 10^{-8}$ s

となる．したがって，緩和の原因が双極子-双極子相互作用の場合，交差ピークは常に負になる．図 15.29 に ROESY の対角ピークと交差ピークの混合時間依存性を示す．

化学交換の場合には，NOESY と同様に，交差ピークは正になる．このことを利用すると，交差緩和と化学交換を区別できる[36]．

すでに述べたように，ROESY はスピンロックパルスを用いるので，効率は悪いが TOCSY の交差ピークを生ずる．TOCSY の交差ピークは対角ピークと同符号であるが，ROESY の交差ピークは異符号であるので区別できる．

15.4 コヒーレンス移動経路選択 位相回しと磁場勾配パルス

2次元 NMR 測定の位相回しの設計を体系化するために ,Bain[37] ,Bodenhausen ら[38] はコヒーレンス移動経路 (coherence transfer pathway) の選択という考えを導入した．すでに第 4 章で述べたように，系のハミルトニアン H の異なる 2 つの固有状態 m, n に対する 0 でない密度行列の要素 σ_{mn} のことをコヒーレンスという．このとき，系の状態 は

$$\Psi = c_m |m\rangle + c_n |n\rangle$$

と表すことができるので，異なる 2 つの固有状態の重ね合わせ (superposition , 混ざり合い)とも考えられる．第 3 章 4 節で述べたように，このような状態は遷移状態である．

スピン系のコヒーレンスが，磁気量子数 M_m と M_n を持つ 2 つの固有状態 m と n の間に存

在するとき、 $p = M_m - M_n$ をコヒーレンス σ_{mn} の次数 (coherence orderあるいはcoherence level) という。横磁化は $p = \pm 1$ の次数をもつので、コヒーレンスは横磁化の概念を拡張したものである。次数 p のコヒーレンスを p 量子コヒーレンスともいう。

図 15. 30 に示したような n 個のパルス (あるいは複合パルス) からなるパルス系列を考える。第 1 パルスの直前でスピンは熱平衡にあり、最終パルス後に $F_x + iF_y$ に比例する横磁化を観測する。コヒーレンスは、外部からの高周波磁場による励起によってのみ、異なる次数のコヒーレンスへと移動することができ、外部高周波磁場が存在しない時には、スピンのハミルトニアンのもとで時間発展するが、その次数は不変である。最初、熱平衡状態のコヒーレンスのない状態から出発すると、第 1 の 90° パルスで次数 ± 1 のコヒーレンスが作られる。その後のパルスによって、スピン $1/2$ の L 個のスピンからなる系については、 $-L, -L+1, \dots, L$ の次数のコヒーレンスが

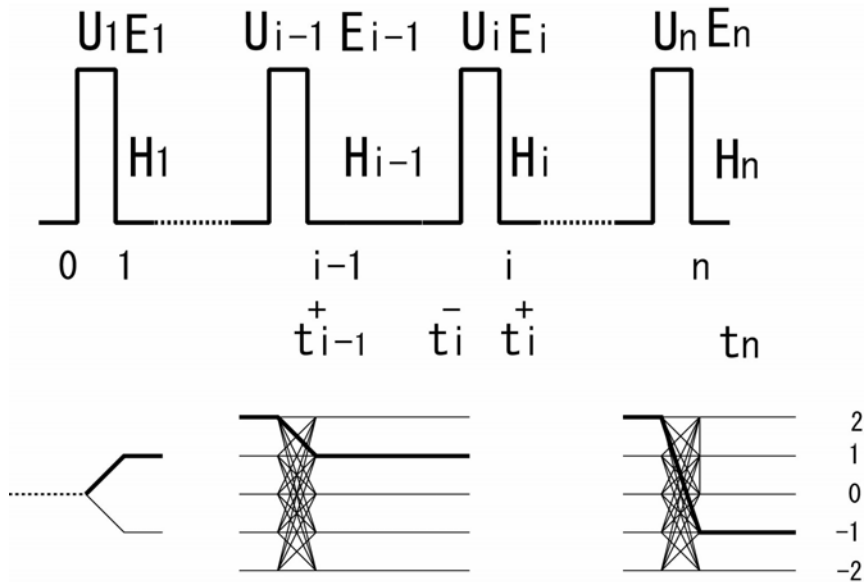


図 15. 30 n 個のパルスからなるパルス系列 (上) とコヒーレンス移動経路 (下). U_i は i 番目のパルスのプロパゲータ. H_i と E_i は i 番目のパルス後のスピンのハミルトニアンとそのプロパゲータ. t_i^- と t_i^+ は、それぞれ、 i 番目のパルスの直前と直後の時刻。コヒーレンス移動経路の右にコヒーレンスの次数を示す。点線はコヒーレンスのない状態、太線は選択する経路を示す

可能で、それらを径由して最後に次数 -1 ($F_x - iF_y$ に比例する横磁化を観測する場合には、次数 $+1$) のコヒーレンスが観測される。このようなコヒーレンスの移動の道順をコヒーレンス移動経路という。色々なコヒーレンス移動経路のうち、ある特定の 1 つの経路を経てきたコヒーレンスのみを選択して観測することをコヒーレンス移動経路の選択という。パルスの位相を変えたいいくつかの測定を行い、それらの結果を加え合わせ

ることによって特定のコヒーレンス移動経路のみを選択することができる。また、磁場勾配パルスによってもコヒーレンス移動経路を選択することができる。はじめに、位相回しによるコヒーレンス移動経路選択について述べる。

(A) 位相回しによるコヒーレンス移動経路選択

密度行列は色々な次数のコヒーレンスに分解して表すことができる。

$$\sigma = \sum_p \sigma^p \quad (15.4.1a)$$

$$\sigma^p = \sum_{ab} \sigma_{ab}^p |a\rangle\langle b| \quad (15.4.1b)$$

ここで、和は $M_a - M_b = p$ を満たす状態 a, b についてとる。 i 番目のパルスのプロパゲータを U_i とすると、パルスの前後で密度行列は

$$\sigma(t_i^+) = U_i \sigma(t_i^-) U_i^{-1} \quad (15.4.2)$$

と変化する。ここで、 t_i^- 、 t_i^+ は、それぞれ、 i 番目のパルスの直前、直後の時刻である。

パルスによって、次数 p のコヒーレンスは次数 p' の色々なコヒーレンスへと分岐していくので、

$$\sigma^p(t_i^-) \xrightarrow{U_i} U_i \sigma^p(t_i^-) U_i^{-1} = \sum_{p'} \sigma^{p'}(t_i^+) \quad (15.4.3)$$

と表すことができる。

パルスの位相を だけ変えることは、 z 軸の回りに座標系を 回転することと同等であるので、 i 番目のパルスの位相が φ_i の時のプロパゲータは位相 0 のプロパゲータと

$$U_i(\varphi_i) = \exp\{-i\varphi_i F_z\} U_i(0) \exp\{i\varphi_i F_z\} \quad (15.4.4)$$

の関係にあり、位相 φ_i のパルス後の密度行列は、

$$U_i(\varphi_i) \sigma^p(t_i^-, \varphi = 0) U_i(\varphi_i)^{-1} = \exp\{-i\varphi_i F_z\} U_i(0) \exp\{i\varphi_i F_z\} \sigma^p(t_i^-, \varphi = 0) \times \exp\{-i\varphi_i F_z\} U_i(0)^{-1} \exp\{i\varphi_i F_z\}$$

となる。両辺の mn 要素は

$$\begin{aligned} & \{U_i(\varphi_i) \sigma^p(t_i^-, \varphi = 0) U_i(\varphi_i)^{-1}\}_{mn} = \\ & \sum_{k,l} \exp\{-i\varphi_i M_m\} \{U_i(0)\}_{mk} \exp\{i\varphi_i M_k\} \{\sigma^p(t_i^-, \varphi = 0)\}_{kl} \exp\{-i\varphi_i M_l\} \{U_i(0)^{-1}\}_{ln} \times \\ & \times \exp\{i\varphi_i M_n\} \\ & = \sum_{k,l} \exp\{-i\varphi_i (M_m - M_n)\} \exp\{i\varphi_i (M_k - M_l)\} \{U_i(0)\}_{mk} \{\sigma^p(t_i^-, \varphi = 0)\}_{kl} \{U_i(0)^{-1}\}_{ln} \\ & = \sum_{p'} \exp(-i\varphi_i p) \exp(i\varphi_i p') \sigma^{p'}(t_i^+, \varphi = 0) \end{aligned}$$

であるので,

$$U_i(\varphi_i)\sigma^p(t_i^-)U_i(\varphi_i)^{-1} = \sum_{p'} \sigma^{p'}(t_i^+) \exp\{-i\Delta p_i \varphi_i\} \quad (15.4.5)$$

と表すことができる. ここで,

$$p = M_m - M_n$$

$$p' = M_k - M_l$$

Δp_i は i 番目のパルスによるコヒーレンス移動前後の次数変化で

$$\Delta p_i = p'(t_i^+) - p(t_i^-) \quad (15.4.6)$$

である. $i=1$ に対しては, 初期状態でコヒーレンスのない熱平衡状態から出発するので,

$$\Delta p_1 = p'(t_1^+)$$

コヒーレンスのない状態も $p=0$ とすると, (15.4.6) が成り立つ. しかし, コヒーレンスのない状態と, 次数 0 のコヒーレンス (0 量子コヒーレンス) がある状態とは区別して考える必要がある.

最初, コヒーレンスのない状態から出発して, 最後に次数 -1 のコヒーレンスで終わるものが観測されるので, 観測可能なコヒーレンス移動経路は

$$\sum_i \Delta p_i = -1 \quad (15.4.7)$$

を満たす.

はじめ σ_0 から出発して n 個のパルスの後, 時刻 t_n における密度行列は

$$\sigma(t_n) = E_n(t_n)U_n E_{n-1}(t_{n-1})U_{n-1} \cdots E_1(t_1)U_1 \sigma_0 U_1^{-1} E_1^{-1}(t_1) \cdots U_n^{-1} E_n^{-1}(t_n) \quad (15.4.8a)$$

ここで, E_k は k 番目のパルス後のハミルトニアンを H_k とすると,

$$E_k(t_k) = \exp(-i \frac{H_k}{\hbar} t_k) \quad (15.4.8b)$$

で与えられるプロパゲータである. n 個のパルス後 FID 観測時点で観測可能なコヒーレンスは次数 -1 のものであるので, FID 信号は

$$s(t_n) = \text{Tr}\{\sigma^{-1}(t_n)(F_x + iF_y)\}$$

と表すことができる. この信号には色々なコヒーレンス移動経路を通ってきた信号が混ざり合っている. その中から特定のコヒーレンス移動経路を通ってきたものを選び出すことを考える.

パルスの次数変化 Δp_i を n 個時間順に並べたベクトル

$$\Delta p = \{\Delta p_1, \Delta p_2, \dots, \Delta p_n\} \quad (15.4.9)$$

で指定された1つのコヒーレンス移動経路の密度行列を考える。n個のパルスの位相が

$$\varphi = \{\varphi_1, \varphi_2, \dots, \varphi_n\} \quad (15.4.10)$$

であるときの密度行列は、すべてのパルスの位相が0の時の密度行列と、

$$\begin{aligned} & \sigma^{-1}(\Delta p_1, \Delta p_2, \dots, \Delta p_n, \varphi_1, \varphi_2, \dots, \varphi_n, t_n) \\ &= \sigma^{-1}(\Delta p_1, \Delta p_2, \dots, \Delta p_n, \varphi_1 = \varphi_2 = \dots = \varphi_n = 0, t_n) \exp\{-i(\Delta p_1 \varphi_1 + \Delta p_2 \varphi_2 + \dots + \Delta p_n \varphi_n)\} \\ &= \sigma^{-1}(\Delta p, \varphi = \mathbf{0}, t_n) \exp\{-i\Delta p \cdot \varphi\} \end{aligned} \quad (15.4.11)$$

の関係があることがわかる。実際には、色々なコヒーレンス移動経路を通ってきた信号があるので、最終パルス後のFID信号は、

$$\begin{aligned} s(\varphi, t) &= \sum_{\Delta p} \text{Tr}\{\sigma^{-1}(\Delta p, \varphi, t)(F_x + iF_y)\} \\ &= \sum_{\Delta p} \text{Tr}\{\sigma^{-1}(\Delta p, \varphi = \mathbf{0}, t)(F_x + iF_y)\} \exp(-i\Delta p \cdot \varphi) \\ &= \sum_{\Delta p} s(\Delta p, \varphi = \mathbf{0}, t) \exp\{-i\Delta p \cdot \varphi\} \end{aligned} \quad (15.4.12)$$

と表される。これは、パルス位相 $\varphi = \{\varphi_1, \varphi_2, \dots, \varphi_n\}$ のFID信号が色々なコヒーレンス移動経路を通ってきた信号の離散的な多重フーリエ変換の形で表されることを示している。したがって、ある特定のコヒーレンス経路 Δp (どのような経路でもよいが、ここでは最後に次数-1になる経路) をたどってきた信号は、フーリエ逆変換で求められ、

$$s(\Delta p, t) = A \sum_{\varphi} s(\varphi, t) \exp\{i\Delta p \cdot \varphi\} \quad (15.4.13)$$

と表される。Aは規格化因子である。i番目のパルス前後のコヒーレンス次数変化が p_i である信号の寄与は

$$s(\Delta p_i, t) = A_i \sum_{\varphi_i} s(\varphi_i, t) \exp\{i\Delta p_i \cdot \varphi_i\} \quad (15.4.14)$$

と書くことができる。A_iは規格化因子である。パルス前後の可能なコヒーレンス次数変化がN_i個の連続した整数値をとる時、パルス位相を

$$\varphi_i = \frac{k_i 2\pi}{N_i}, \quad k_i = 0, 1, \dots, N_i - 1 \quad (15.4.15)$$

としたN_i個の実験を行うことによって、ある特定のコヒーレンス次数変化の信号を選び出すことができる。

$$s(\Delta p_i, t) = \frac{1}{N_i} \sum_{k_i=0}^{N_i-1} s(\varphi_{k_i}, t) \exp\{i2\pi\Delta p_i \frac{k_i}{N_i}\}$$

全体では

$$s(\Delta \mathbf{p}, t) = \frac{1}{N} \sum_{k_1=0}^{N_1-1} \sum_{k_2=0}^{N_2-1} \cdots \sum_{k_n=0}^{N_n-1} s(\varphi, t) \exp\{i\Delta \mathbf{p} \cdot \varphi\} \quad (15.4.16a)$$

$$N = N_1 N_2 \cdots N_n \quad (15.4.16b)$$

となり、 N 個の異なるパルス位相の組についてFIDを観測し、それをフーリエ変換することによって、特定のコヒーレンス移動経路を通ってきた信号を求めることができる。ここで実際にフーリエ変換する必要はなく、積算位相を $-\Delta \mathbf{p} \cdot \varphi$ としてデータを取り込むとよい。

上述の議論はコヒーレンス次数の差が $\Delta p_i \pm nN_i$ 、 $n=0,1,\dots$ でも成り立つので、コヒーレンス移動経路を一義的に決めることはできない。実際には、スピン $1/2$ の L 個のスピン系では、最大の次数が L なので、 $n=0$ としてよい。

選択すべき Δp_i が、 N_i 個の連続する整数値の中から1つ選ぶ場合には、少なくとも N_i 個の異なるパルス位相で測定する必要がある。たとえば、コヒーレンス次数の変化が -2 、 -1 、 0 の3つの経路のうち、 -1 と 0 の経路を消去して、 -2 の経路のみを残す場合には、3つの中から選ぶので、 $N_i=3$ で、位相は $\varphi_i=0, 2\pi/3, 4\pi/3$ である。これを

$$\Delta p_i : -2, (-1), (0)$$

と表し、括弧は消去する経路を示す。

以下に、いくつかの場合について考える。

() COSY

図15.31はCOSYのコヒーレンス移動経路を示したものである。第1パルス前でスピン系が熱平衡状態にあると、コヒーレンスはない。第1パルスによって、次数 $+1, -1$ のコヒーレンスが生成するが、 90° パルスの不完全性を考慮すると、コヒーレンスのない状態も残る。第2のパルスによって、色々な次数のコヒーレンスが生成されるが、そのうちで、次数 -1 のものだけが観測される。コヒーレンス移動経路 $0 \ 1 \ -1$ がNタイプで、 $0 \ -1 \ -1$ がPタイプである。 $0 \ 0 \ -1$ は軸性ピークを生成する。第2パルス前後のコヒーレンス次数の差が -2 のものを残し、 -1 と 0 のものを消去することで、コヒーレンス移動経路 $0 \ 1 \ -1$ のNタイプが選択される。これは上に例としてあげた $\Delta p_2 : -2, (-1), (0)$ の場合である。第1パルスの位相は固定して、第2パルスの位相を $\varphi_2=0, 2\pi/3, 4\pi/3$ と3ステップで変え、それぞれ積算位相を $\psi=0, 4\pi/3, 2\pi/3$

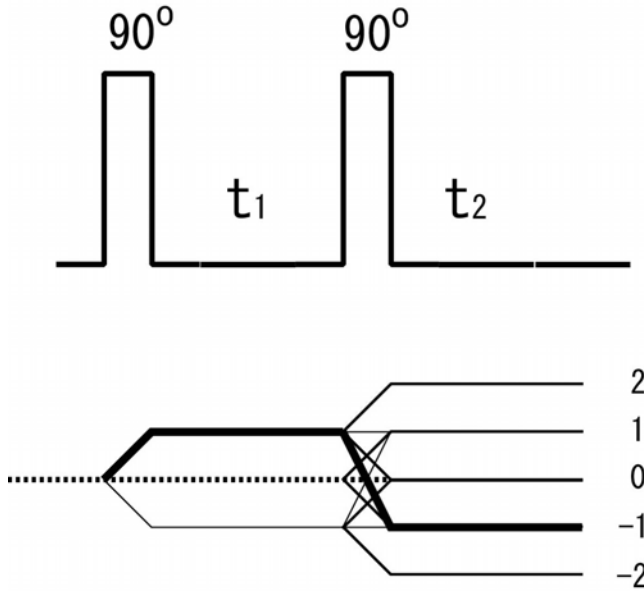


図 15.31 COSY のコヒーレンス移動経路の選択．太線が N タイプ

としてデータを取り込む．

しかし、 $2\pi/3$ (120°) ごとの位相回しは一般的でない．通常の分光計では、 $\pi/2$ (90°) ごとの移相器を備えているのが一般的なので、パルスの位相、積算位相ともに $\pi/2$ の整数倍で変えることは容易である．したがって、実際には $N_2=4$ として、表 15.4 に示すように、第 2 パルスの位相を $0(x)$, $\pi/2(y)$, $\pi(-x)$, $3\pi/2(-y)$ 、積算位相を $0(x)$, $\pi(-x)$, $0(x)$, $\pi(-x)$ と回して、4 回の積算をする．このような位相回しを Exorcycle (39) という．さらに、パルスの不完全性、2 つの受信チャンネルの不均衡を補償するために、全体の位相を $\pi/2$ づつ変え(CYCLOP)、16 回の積算をおこなう．

純吸収型の COSY を得るためには、積算の奇数番目と偶数番目を別々のメモリーに保存し、States の方法で処理する．

$\Delta p_2 : -2, (-1), (0)$ でなく、 $\Delta p_1 : (-1), (0), 1$ としてもよい．なぜなら、 $p_2 = -1$ は FID 検出の際に自動的に決まるからである． $\Delta p_1 = +1$ を選択するためには、第 2 パルスの位相を x に固定し、第 1 パルスの位相を $x, y, -x, -y$ と回して、積算位相を $x, -y, -x, y$ と回してもよい．

() 2QF-COSY

図 15.32 に 2QF-COSY の場合のコヒーレンス移動経路を示す．N タイプを選択するとすると、経路は $0 +1 +2 -1$ と $0 +1 -2 -1$ の 2 つの場合がある．これを選ぶためには、

$$\Delta p_1 : (-1), (0), 1$$

$$\Delta p_3 : -3, (-2), (-1), (0), 1$$

である。したがって、 $N_1=3$ 、 $N_3=4$ で、計 12 回の位相回しでよいが、上述の理由により $N_1=4$ として、表 15.12 に示す 16 サイクルの位相回しを行う。

表 15.12 2QF-COSY の位相回し

実験番号 k	第 1 パルスの位相 $1k$	第 3 パルスの位相 $3k$	積算位相 $-\sum_i \Delta p_i \varphi_{ik} = -\varphi_{1k} + 3\varphi_{3k}$
1	0(x)	0(x)	0(x)
2	0(x)	$\pi/2(y)$	$3\pi/2(-y)$
3	0(x)	$\pi(-x)$	$\pi(-x)$
4	0(x)	$3\pi/2(-y)$	$\pi/2(y)$
5	$\pi/2(y)$	0(x)	$3\pi/2(-y)$
6	$\pi/2(y)$	$\pi/2(y)$	$\pi(-x)$
7	$\pi/2(y)$	$\pi(-x)$	$\pi/2(y)$
8	$\pi/2(y)$	$3\pi/2(-y)$	0(x)
9	$\pi(-x)$	0(x)	$\pi(-x)$
10	$\pi(-x)$	$\pi/2(y)$	$\pi/2(y)$
11	$\pi(-x)$	$\pi(-x)$	0(x)
12	$\pi(-x)$	$3\pi/2(-y)$	$3\pi/2(-y)$
13	$3\pi/2(-y)$	0(x)	$\pi/2(y)$
14	$3\pi/2(-y)$	$\pi/2(y)$	0(x)
15	$3\pi/2(-y)$	$\pi(-x)$	$3\pi/2(-y)$
16	$3\pi/2(-y)$	$3\pi/2(-y)$	$\pi(-x)$

$$\Delta p_1 = 1, \quad \Delta p_3 = -3, \quad \text{第 2 パルスの位相 } \varphi_{2k} = 0(x)$$

() NOESY

図 15.33 に NOESY の場合のコヒーレンス移動経路を示す。N タイプを選択すると、経路は $0 \rightarrow +1 \rightarrow 0 \rightarrow -1$ である。したがって、

$$\Delta p_1 : (-1), (0), 1$$

$$\Delta p_3 : (-p^{\max} - 1), (-p^{\max}), \dots, -1, \dots, (p^{\max} - 1)$$

である。ここで p^{\max} は最大の多量子コヒーレンスの次数である。第 3 パルス前後で

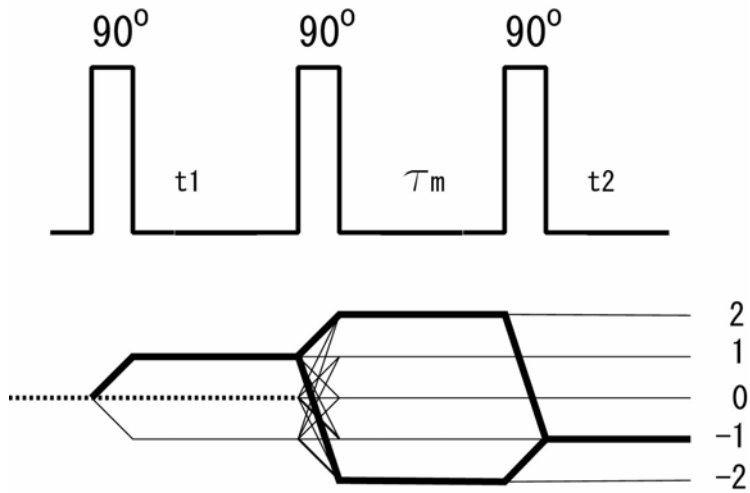


図 15.32 2QF-COSY のコヒーレンス移動経路の選択 . 太線が N タイプ

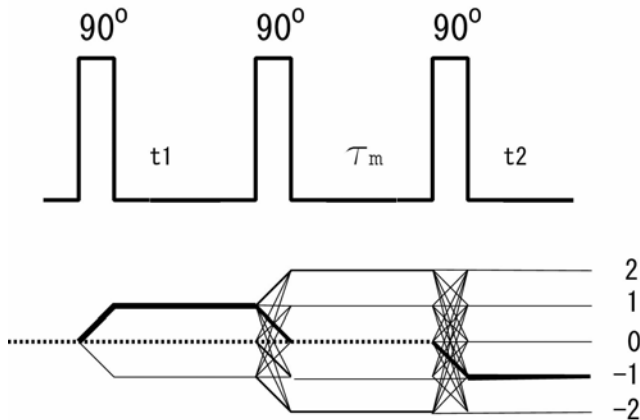


図 15.33 NOESY のコヒーレンス移動経路の選択 . 太線が N タイプ

$\Delta p_3 = -1$ の経路を残し, その他を消去するためには, $N_3 = p^{\max} + 1$ とするとよい .
 $N_1 = 4$, $N_3 = 4$ にすると, 3 量子コヒーレンスまでは抑制することができる . 表 15. 13
 に位相回しを示す . この表の 1 , 1 1 , 2 , 1 2 , 6 , 1 6 , 7 , 1 3 行が表 15. 11
 の 1 から 8 行に対応する . その他の行とあわせて 3 量子コヒーレンスまでを消去してい
 る . しかし, すでに述べたように, 0 量子コヒーレンスは, コヒーレンスのない状態と
 同じに扱っているので, 消去されない .

表 15.13 NOESY の位相回し

実験番号 k	第 1 パルスの 位相 Ψ_{1k}	第 3 パルスの 位相 Ψ_{3k}	積算位相 $-\sum_i \Delta p_i \varphi_{ik} = -\varphi_{1k} + \varphi_{3k}$
1	$0(x)$	$0(x)$	$0(x)$
2	$0(x)$	$\pi/2(y)$	$\pi/2(y)$
3	$0(x)$	$\pi(-x)$	$\pi(-x)$
4	$0(x)$	$3\pi/2(-y)$	$3\pi/2(-y)$
5	$\pi/2(y)$	$0(x)$	$3\pi/2(-y)$
6	$\pi/2(y)$	$\pi/2(y)$	$0(x)$
7	$\pi/2(y)$	$\pi(-x)$	$\pi/2(y)$
8	$\pi/2(y)$	$3\pi/2(-y)$	$\pi(-x)$
9	$\pi(-x)$	$0(x)$	$\pi(-x)$
10	$\pi(-x)$	$\pi/2(y)$	$3\pi/2(-y)$
11	$\pi(-x)$	$\pi(-x)$	$0(x)$
12	$\pi(-x)$	$3\pi/2(-y)$	$\pi/2(y)$
13	$3\pi/2(-y)$	$0(x)$	$\pi/2(y)$
14	$3\pi/2(-y)$	$\pi/2(y)$	$\pi(-x)$
15	$3\pi/2(-y)$	$\pi(-x)$	$3\pi/2(-y)$
16	$3\pi/2(-y)$	$3\pi/2(-y)$	$0(x)$

$$\Delta p_1 = 1, \quad \Delta p_3 = -1, \quad \text{第 2 パルスの位相 } \varphi_{2k} = 0(x)$$

(B) 磁場勾配パルスによるコヒーレンス移動経路の選択

パルス磁場勾配 (pulsed field gradient, PFG) を利用して特定のコヒーレンスを選択する方法は、すでに 1978 年に提案されている[40,41]。FreemanらはCOSYの位相回しの代わりに磁場勾配パルスを用いた[42]。また、多量子フィルターとしても用いられた。GE InstrumentsのHurdは、磁場勾配パルスを利用した 2QF-COSYを報告した[43]。彼は、GEとgradient enhancedとを掛けて、これにge-2qcosyというアクロニムを付けた。位相回しがないから、試料濃度が充分ならば、積算する必要がなく、短時間で測定できる利点がある。

() COSY

まず、磁場勾配パルスを利用した COSY について説明する。図 15.34 に静磁場方向の磁場勾配パルスを利用した COSY のパルス系列を示す。位置 z に比例した磁場勾配パルスは、渦電流 (eddy current) による磁場の変動を避けるために、時間的に不連続な (急激な) 磁場変化をしない関数として

$$G_1 z = G_1^0 z \cos\left(\frac{\pi t}{\tau}\right), \quad -\frac{\tau}{2} < t < \frac{\tau}{2} \quad (15.4.17)$$

のような半余弦型のものを用いる。あるいは、ガウス関数型でもよい。 τ 秒間磁場勾配パルス G_1 が作用すると、位置 z にある A 核は、

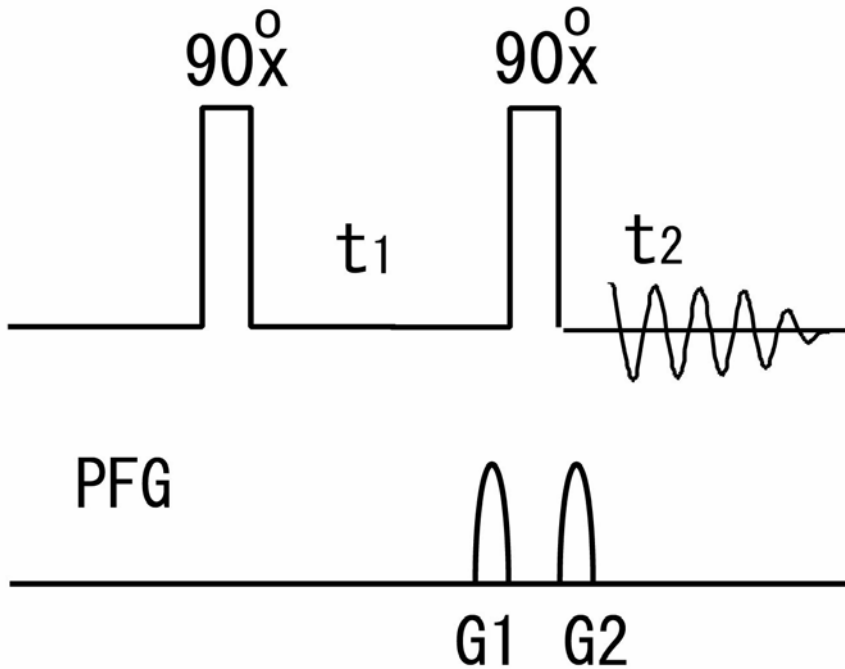


図 15.34 磁場勾配パルスを用いた COSY のパルス系列。 $G_1 : G_2 = 1 : 1$

$$\delta_{A1} = \gamma(1 - \sigma_A)z \int_{-\tau/2}^{\tau/2} G_1(t) dt = \frac{2}{\pi} \gamma(1 - \sigma_A) \tau G_1^0 z \quad (15.4.18)$$

だけ位相が進む。ここで、 σ_A は A 核の遮蔽定数である。第 2 の 90°パルスの前後に、 G_1 、 G_2 の磁場勾配パルスを 秒間加えたときの、位置 z にある A 核からの信号は、分子の拡散が無視できるときには、(15.2.5)より

$$\begin{aligned}
 s_A = & \frac{1}{4} \left\{ \sin\left[\left(\omega_A + \frac{J}{2}\right)t_1 + \delta_{A1}\right] + \sin\left[\left(\omega_A - \frac{J}{2}\right)t_1 + \delta_{A1}\right] \right\} \\
 & \times \left\{ \exp\left[i\left(\omega_A + \frac{J}{2}\right)t_2 + \delta_{A2}\right] + \exp\left[i\left(\omega_A - \frac{J}{2}\right)t_2 + \delta_{A2}\right] \right\} \\
 & + \frac{i}{4} \left\{ \cos\left[\left(\omega_X + \frac{J}{2}\right)t_1 + \delta_{X1}\right] - \cos\left[\left(\omega_X - \frac{J}{2}\right)t_1 + \delta_{X1}\right] \right\} \\
 & \times \left\{ \exp\left[i\left(\omega_A + \frac{J}{2}\right)t_2 + \delta_{A2}\right] - \exp\left[i\left(\omega_A - \frac{J}{2}\right)t_2 + \delta_{A2}\right] \right\}
 \end{aligned}$$

ここで、 δ_{A1} 、 δ_{A2} 、 δ_{X1} は磁場勾配パルス 1, 2 による A 核, X 核の位相の進みを表す。

これらの項は、たとえば、

$$\begin{aligned}
 & \left\{ \cos\left[\left(\omega_X + \frac{J}{2}\right)t_1 + \delta_{X1}\right] \exp\left[i\left(\omega_A - \frac{J}{2}\right)t_2 + \delta_{A2}\right] \right\} = \frac{1}{2} \left\{ \exp\left[i\left(\left(\omega_X + \frac{J}{2}\right)t_1 + \delta_{X1}\right)\right] \right. \\
 & \left. + \exp\left[-i\left(\left(\omega_X + \frac{J}{2}\right)t_1 + \delta_{X1}\right)\right] \exp\left[i\left(\omega_A - \frac{J}{2}\right)t_2 + \delta_{A2}\right] \right\} \\
 & = \frac{1}{2} \left\{ \exp\left[i\left(\omega_X + \frac{J}{2}\right)t_1\right] \exp\left[i\left(\omega_A - \frac{J}{2}\right)t_2\right] \exp\left[i\left(\delta_{X1} + \delta_{A2}\right)\right] \right. \\
 & \left. + \frac{1}{2} \left\{ \exp\left[-i\left(\omega_X + \frac{J}{2}\right)t_1\right] \exp\left[i\left(\omega_A - \frac{J}{2}\right)t_2\right] \right\} \exp\left[-i\left(\delta_{X1} - \delta_{A2}\right)\right] \right\}
 \end{aligned}$$

となり、2つの磁場勾配パルスによる位相の進みの和(Pタイプ)と差(Nタイプ)の形になる。磁場勾配の大きさが $G_1^0 = 0.1 \text{ T/m}$ (10 Gauss/cm)、 $\tau = 1 \text{ ms}$ 、試料の長さ $z = 1 \text{ cm}$ とすると、試料の両端で約 $2\pi \times 54$ の位相の差があるので、試料全体の磁化は消える。しかし、 $\delta_{X1} - \delta_{A2} = 0$ のときには、第1項からの寄与は消えるが、第2項については、磁場勾配パルス 1 による位相の進みが磁場勾配パルス 2 によって打ち消されるので、試料全体の磁化が残り、信号を生ずる。これはNタイプの信号である。第1項からの寄与を消去し、第2項からの寄与のみを選択する条件は、遮蔽定数がppmの程度なので

$$\frac{G_1^0}{G_2^0} = \frac{1 - \sigma_A}{1 - \sigma_X} \approx 1$$

すなわち、

$$G_2^0 = G_1^0 \tag{15.4.19}$$

である。一方、 $G_2^0 = -G_1^0$ とすると、Pタイプが選択される。

一般に、 G_1, G_2, \dots, G_n の磁場勾配パルスをそれぞれ $\tau_1, \tau_2, \dots, \tau_n$ 秒間加えたとき、コヒーレンス移動経路 $0 \rightarrow p_1 \rightarrow p_2 \rightarrow \dots \rightarrow p_n$ が選択される条件は、磁場勾配パルスによる p 量子コヒーレンスの位相の進みが 1 量子コヒーレンスの p 倍であることを考えると、

$$\sum_k p_k G_k \tau_k = 0 \tag{15.4.20}$$

となる。

() NOESY

図 15. 35 は磁場勾配パルスを利用したNOESYのパルス系列である．第 1 磁場勾配パルスで与えられた位相情報は，第 2 90°パルスによってz磁化として保存される．これは第 3 90°パルスによって再び横磁化になるが， $G_3^0 = G_1^0$ とすると，COSYと同様に，Nタイプの信号が再結像して残る．混合期に，すべてのコヒーレンスを消去するために，第 1 磁場勾配パルス程度の適当な大きさの磁場勾配パルス G_2^0 を加えて，位相を発散させる．ただし，0量子コヒーレンスが残る（0量子コヒーレンスを消去するには，静磁場と同程度の大きさの磁場勾配パルスを必要とする）．

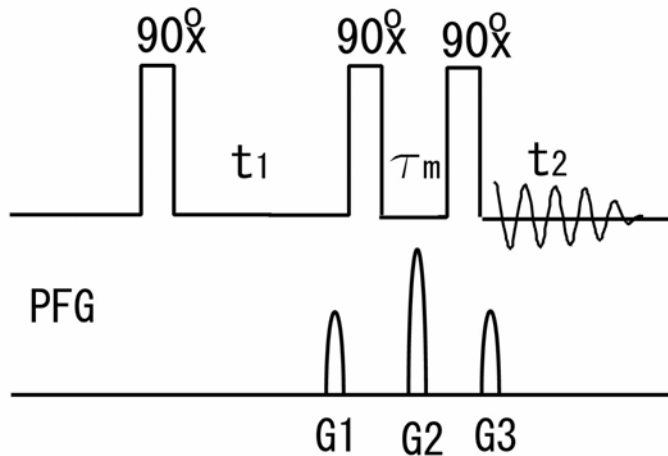


図 15. 35 磁場勾配パルスを用いた NOESY のパルス系列． $G_1 : G_3 = 1 : 1$ ． G_2 は G_1 と同程度の適当な大きさ

() 2QF-COSY

図 15. 36 は 2QF-COSY のパルス系列である． $0 \rightarrow 1 \rightarrow 2 \rightarrow -1$ のコヒーレンス移動経路を選択するためには，

$$(1) \times G_1 + (2) \times G_2 + (-1) \times G_3 = 0$$

である．これを満たす G_1, G_2, G_3 の組は多数存在する．その中で単純なものは

$G_1 : G_2 : G_3 = 1 : 1 : 3$ である．しかし，この磁場勾配の組合せは，

$$(-1) \times G_1 + (4) \times G_2 + (-1) \times G_3 = 0$$

も満たす．Pタイプの4量子コヒーレンスを経由するものも許す．別な組み合わせは，第 1，第 2，第 3 磁場勾配パルスの大きさが $2 : 1 : 4$ のものである．これは，

$$-1 \times G_1 + 6 \times G_2 + (-1) \times G_3 = 0$$

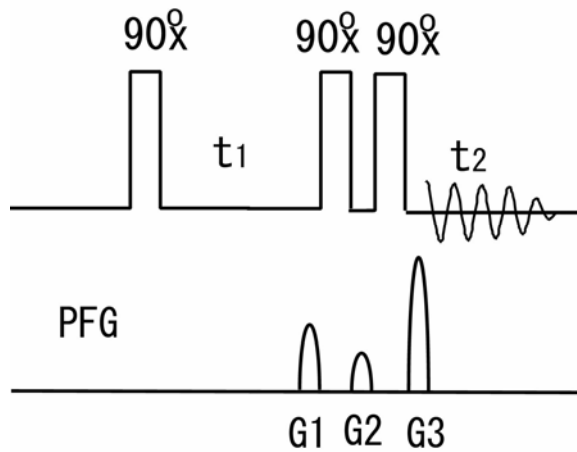


図 15.36 磁場勾配パルスを用いた 2QF-COSY のパルス系列 . $G1 : G2 : G3 = 2 : 1 : 4$

すなわち, P タイプの 6 量子コヒーレンスを経由するものも許す . 高次の多量子コヒーレンスほど減衰が激しいので, $2 : 1 : 4$ で充分である .

磁場勾配パルスの応用については Parella のすぐれた総説がある[44] .

文献

- 1) W. P. Aue, E. Bartholdi, and R. R. Ernst, *J. Chem. Phys.* **64**, 2229(1976).
- 2) R. R. Ernst, G. Bodenhausen, and A. Wokaun, "Principles of Nuclear Magnetic Resonance in One and Two Dimensions", Clarendon Press, Oxford, 1987.
- 3) W. P. Aue, J. Karhan, and R. R. Ernst, *J. Chem. Phys.* **64**, 4226(1976).
- 4) A. Kumar, *J. Magn. Reson.* **30**, 227(1978).
- 5) G. Bodenhausen, R. Freeman, R. Niedermeyer, and D. L. Turner, *J. Magn. Reson.* **26**, 133(1977).
- 6) D. Marion and K. Wüthrich, *Biochem. Biophys. Res. Commun.* **113**, 967(1983).
- 7) A. Bax, R. Freeman, and G. A. Morris, *J. Magn. Reson.* **42**, 164(1981).
- 8) K. Nagayama, A. Kumar, K. Wüthrich, and Ernst, *J. Magn. Reson.* **40**, 321(1980).
- 9) A. A. Maudsley, A. Wokaun, and R. R. Ernst, *Chem. Phys. Lett.* **55**, 9(1978).
- 10) D. J. States, R. A. Haberkorn, and D. J. Ruben, *J. Magn. Reson.* **48**, 286(1982).
- 11) D. Marion, M. Ikura, R. Tschudin, and A. Bax, *J. Magn. Reson.* **85**, 393(1989).
- 12) S. Schäublin, A. Höhener, and R. R. Ernst, *J. Magn. Reson.* **13**, 196(1974).
- 13) A. Bax and R. Freeman, *J. Magn. Reson.* **44**, 542(1981).

- 14) U. Piantini, O. W. Sørensen, and R. R. Ernst, *J. Am. Chem. Soc.* **104**, 6800(1982).
- 15) L. Braunschweiler and R. R. Ernst, *J. Magn. Reson.* **53**, 521(1983).
- 16) D. G. Davis and A. Bax, *J. Am. Chem. Soc.* **107**, 2820(1985).
- 17) A. Bax and D. G. Davis, *J. Magn. Reson.* **65**, 355(1985).
- 18) D. B. Zax, A. Bielecki, K. W. Zilm, A. Pines, and D. P. Weitekamp, *J. Chem. Phys.* **83**, 4877(1985).
- 19) S. R. Hartmann and E. L. Hahn, *Phys. Rev.* **128**, 2042(1962).
- 20) C. Griesinger, G. Otting, K. Wüthrich, and R. R. Ernst, *J. Am. Chem. Soc.* **110**, 7870(1988).
- 21) G. Eich, G. Bodenhausen, and R. R. Ernst, *J. Am. Chem. Soc.* **104**, 3731(1982).
- 22) C. Griesinger, O. W. Sørensen, and R. R. Ernst, *J. Am. Chem. Soc.* **107**, 6394(1985).
- 23) C. Griesinger, O. W. Sørensen, and R. R. Ernst, *J. Chem. Phys.* **85**, 6837(1986).
- 24) C. Griesinger, O. W. Sørensen, and R. R. Ernst, *J. Magn. Reson.* **75**, 474(1987).
- 25) S. Macura and R. R. Ernst, *Mol. Phys.* **41**, 95(1980).
- 26) S. Macura, Y. Huang, D. Suter, and R. R. Ernst, *J. Magn. Reson.* **43**, 259(1981).
- 27) M. Rance, G. Bodenhausen, G. Wagner, K. Wüthrich, and R. R. Ernst, *J. Magn. Reson.* **62**, 497(1985).
- 28) S. Macura, K. Wüthrich, and R. R. Ernst, *J. Magn. Reson.* **46**, 269(1982).
- 29) J. Jeener, B. H. Meier, P. Bachmann, and R. R. Ernst, *J. Chem. Phys.* **71**, 4546(1979).
- 30) B. H. Meier and R. R. Ernst, *J. Am. Chem. Soc.* **101**, 6441(1979).
- 31) G. Bodenhausen and R. R. Ernst, *J. Magn. Reson.* **45**, 367(1981).
- 32) G. Bodenhausen and R. R. Ernst, *J. Am. Chem. Soc.* **104**, 1304(1982).
- 33) A. A. Bothner-By, R. L. Stephens, Ju-mee Lee, C. D. Warren, and R. W. Jeanloz, *J. Am. Chem. Soc.* **106**, 811(1984).
- 34) C. Griesinger and R. R. Ernst, *J. Magn. Reson.* **75**, 261(1987).
- 35) A. Bax and D. G. Davis, *J. Magn. Reson.* **63**, 207(1985).
- 36) D. G. Davis and A. Bax, *J. Magn. Reson.* **64**, 533(1985).
- 37) A. D. Bain, *J. Magn. Reson.* **56**, 418(1984).
- 38) G. Bodenhausen, H. Kogler, and R. R. Ernst, *J. Magn. Reson.* **58**, 370(1984).
- 39) G. Bodenhausen, R. Freeman, and D. L. Turner, *J. Magn. Reson.* **27**, 511(1977).
- 40) A. Maudsley, A. Wokaun, and R. R. Ernst, *Chem. Phys. Lett.* **55**, 9(1978).
- 41) A. Bax, P. G. De Jong, A. F. Mehlkopf, and J. Smidt, *Chem. Phys. Lett.* **69**, 567(1980).
- 42) P. Barker and R. Freeman, *J. Magn. Reson.* **64**, 334(1985).

43) R. E. Hurd, *J. Magn. Reson.* **87**, 422(1990).

44) T. Parella, *Magn. Reson. Chem.* **36**, 467(1998).